

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## 鬼が来た！（鬼子來了）

2000年・中国映画・140分  
配給／東光徳間

2002（平成14）年11月4日鑑賞  
＜ホクテン座・中国映画特集＞

Data

監督：姜文

出演：姜文／香川照之／姜鴻波

### 👁️👁️ みどころ

日中戦争も終わりに近づいた1945年。中国は華北の寒村である事件がおこった。軍艦マーチを鳴り響かせながらの行軍。捕虜となった日本軍人の行動。その捕虜の取扱いをめぐるつまどう村民たち。そんな中、人間の凶気が爆発した。マイナーな劇場でしか上映されなかったが、2000年カンヌ国際映画祭グランプリ受賞の中国映画の力作。とにかく観て、考えることが大切だ。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

#### <ショッキングなタイトルの話題作>

これは2000年カンヌ国際映画祭グランプリを受賞した作品で、新聞紙上でも再三取り上げられた話題作だ。何が話題かというと、日中戦争の中で日本軍や日本軍人が犯した凶気を描いた中国映画という点。もっとも一般のメジャーな映画館では上映されず、マイナーな映画館のみでの上映。私が観たのも某マイナー館。しかし座席は良かった（そんなことはどうでもいいか・・・）。

#### <何とも恐ろしい日本軍（人）の凶気>

舞台は中国の華北。万里の長城の近くにある寒村。時代は、映画の終盤になってわかるのだが、日本が敗戦を迎える1945年8月からさかのぼること半年前のことだ。

映画は日本軍の軍艦マーチでの行進から始まる。その日本軍に媚を売る村の人たち。彼らはそうして日本軍による占領下で何年間も生きてきたのだ。ところがある日、美人のユイアル（姜鴻波）と「お楽しみ」中の村人マー（姜文）の部屋にいきなり「私」があらわれた。「私」はいきなりマーにピストルを突きつけながら部屋に入り込み、「目をつぶれ」と命令。そして「荷物を預けるからそれをしばらく預かっておけ。供述調書をとれ。日本

軍に見つかって殺されたりしたらお前たちの命はない！」ときた。マーはただただ恐怖の中、やむなくこれをOKしたが、その麻袋に入った2つの「荷物」は何と、1人は日本軍人、花屋小三郎（香川照之）、1人は中国人の通訳だった。

物語はここから進行し、紆余曲折を経て、最後はマーの首が飛んだところで終わるが、ストーリー展開の中、いたるところに「あの時代」の「日本軍」や「日本軍人」の凶気が生々しくあらわれる。もちろん私には中国語は理解できないが、主人公のマーやその彼女のユイアル、そして村の長老はじめ多くの脇役たちが必死でしゃべる中国語にも、ものすごい迫力がある。みんな生きていくことに必死なのだ。映画についての予備知識がほとんどなかった分、よけいにスクリーンに目がくぎづけになってしまう。

### **<今の日中関係と対比したら・・・>**

見終わった後は、そりゃグツタリと疲れてしまう。何ともやりきれない思いだ。先日9月22日には日中国交正常化30周年の祝典が北京をはじめあちこちで開催された。そして今や中国経済は日の出の勢い。11月には中国共産党の第16回大会が開かれ、「三つの代表」理論を取り入れながら、いわゆる「革命第3世代」である江沢民から「第4世代」への大幅な権力の移行が行われようとしており、世界の注目の的だ。それにひきかえ、今の日本は・・・。

まあ、それをここで論じても仕方ないが、今から57年前には中国大陆で日本軍がこういう行動をとっていたことは間違いない。もちろんこの映画は作り話であり、史実を忠実に再現したものではない。しかしこれと同様のことがあちこちであっただろうということとは容易に想像できる。

### **<この映画の観客層は・・・>**

予想通り観客は年配の人ばかり。若いカップルは1組もない。しかしこれではダメだ。日中国交正常化30周年の祝典で、あゆ（浜崎あゆみ）やGLAYが華やかに歌っている姿を見ただけでは「歴史の流れの中での今」は見えてこないだろう。良くも悪くもこのような作品を、例えば大学祭で上映して大討論会を開く等のイベントが必要ではないだろうか・・・？とにかく若い人たちがこのような映画を見て、歴史を学習し考えることが必要ではないか。そんなことを考えさせられたショッキングな作品だった。

2002（平成14）年11月5日記